

宮内庁書陵部所蔵『古筆手鑑』（新収本）

田代圭一

一 はじめに

本稿では、宮内庁書陵部に新収本として新たな所蔵となった『古筆手鑑』（E一―四六）の調査が一通り完了したことを機に、所収の古筆切を図版として掲載し、あわせて内容等の一覧を別表に掲げた。以下で触れる古筆切の番号は、別表に付した番号に基づいている。資料紹介ということですので全ての図版を掲げることが企図したため、それぞれの図版が小さくなったこと、また、白黒図版では濃淡の関係で不鮮明な図版が多くなったことをはじめにお詫び申し上げたい。^①また、稿者の調査不足で古筆切の内容、あるいは極札の筆者を判明できなかったものもあるが、それらについては今後も調査を継続していきたい。

二 書誌

一帖。縦三八・〇cm、横三二・一cm、厚さ九・五cmの折帖仕立てで、赤地

に八重桜を形作った金欄表紙（裏表紙も同様）。『古筆手鑑』と墨書した布目橙色地に金泥草花下絵を施した題簽（縦二三・二cm、横五・二cm）を表紙中央上部に貼付するが、表紙、裏表紙、題簽いずれも退色が進んでいる。見返しは金砂子雲霞散らし。二九折で、表裏共に見開き三〇面より成る。押されている古筆切は、表一一一枚、裏一一〇枚の計一二一枚が、筆者を鑑定した極札は一枚の古筆切に複数枚貼られたものや貼られていないものもあり、表は一一枚、裏は一二枚の計二二枚が押されている。配列は伝聖武天皇「大聖武」から始まって伝光明皇后「鳥下絵経切」と続き、以下、宸筆、親王、撰家、清華…と分類配列され、いわゆる「手鑑行列」におおむねよってゐる。中には三蹟の一人、藤原行成（九七二―一〇二七）や寛永の三筆の一人、近衛信尹（一一五六―一六一四）筆と極められた切もあり、それぞれ自筆と認められる切を収める。内容は、写経、書状、物語、和歌関係等広範にわたるが、和歌関係の切が比較的多い。

本手鑑は杉材の被蓋箱に収められており、蓋の上面右側には「古筆手鑑 心定院様より被進 式百五拾式枚」と墨書され、蓋の上面左下と側面に「子第百八拾八号」の札が貼付されている。また、底の外側のみ漆が塗られている。「心定院」は

岡山藩主、池田継政（一七〇二～一七七六）の正室であり、仙台藩主、伊達吉村（一六八〇～一七五二）女の和子（一七〇六～一七四六）。箱に墨書された古筆切の枚数と現在のそれとは違いがあり、現状は当初の状態に改変が加えられていることが推測される（具体例については項目四で触れる）。

三 極札について

近年は極札の筆跡調査の環境も整いつつあり、それらを活用しつつ調査を進めた。古筆家初代、古筆了佐（一五七二～一六六二）の極札も含め、多くの鑑定家の極札を収めており、判明した分で一七人の鑑定家の極札を収める。中には一七歳の若さで早世し、活躍期間が短い古筆家四代、古筆了周（一六七〇～一六八六）の極札も確認された（六）。また、調査時点では筆者を判明させることができなかった極札もあり、今後の調査の進展を期して図版末尾に掲げた。

極札の中では、八六は「伏見院」を「飛鳥井二楽軒宋世」に、一五九は「後柏原院」を「松花堂なり」に、二一〇は「世尊寺殿行房」を「忠（世尊寺殿行忠）（傍線、カッコ共に稿者）」に、いずれも朱で修正している。八六は飛鳥井家の中に、一五九は一六〇の「瀧本坊昭乗」に連続し、二一〇は世尊寺家の中に押されており、現在の配列として不具合は認められない。極札には他にも朱書されたものが見られるが、朱書された極札はいずれも同筆と見なされる。また、朱書ではないが、墨書された極札の中でも別表の一六と三七の「新しい素紙」は、料紙も比較的新しいことから、近代に入って押されたものと考えられる。中でも一六は「後奈良天皇」（傍線稿者）とあるが、こ

の表記は追号から「院」が外された大正十四年（一九二五）以降に付されたことを想起させる。

四 伝来

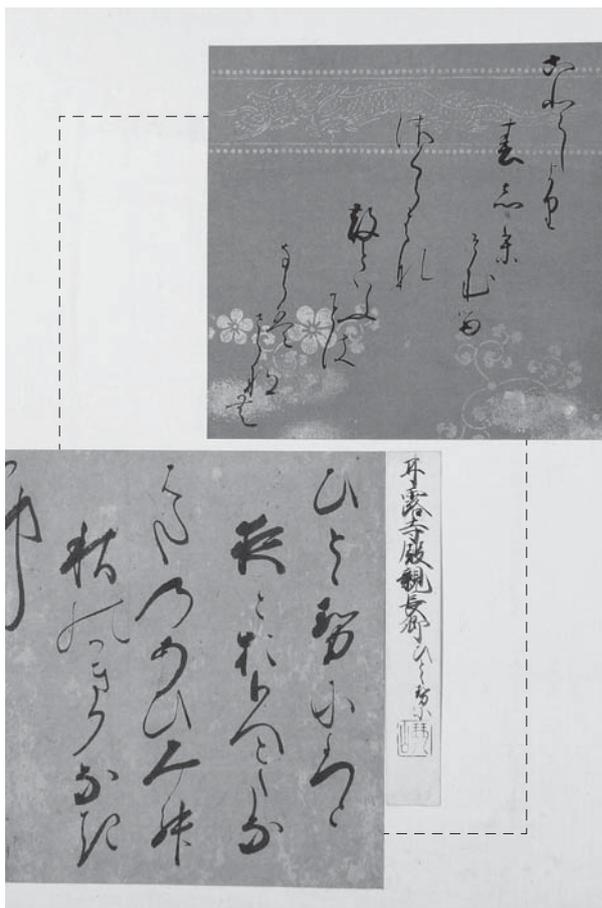
本手鑑は平成十九年度に購入によって書陵部の所蔵となったが、現在残されている手がかりをもとに、制作年代及び伝来を探り、現状に至る経緯をたどってみたい。

まず箱書上部の墨書「心定院様より被進」という書き付けであるが、心定院、つまり池田継政の正室和子によって調進されたことを踏まえると、和子没年の延享三年（一七四六）までには制作されていたことになる。次に手鑑中に押された極札を通覧すると、活動年代が判明している鑑定家のうち、時代の下がる人物は古筆家第七代、古筆了延（一七〇四～一七七四）^③であり、了延も心定院存命中に活躍していたことから、書き付けとの矛盾はない。さらに、杉箱の中には旧蔵者と思われる人物の由緒書のコピーが収められており、入手の経緯が記されている。途中、三行ほど修正テープによって抹消されている箇所があり、判読不能となっていることが悔やまれるが、伝来の過程を探る一助として以下に掲げる（適宜句読点を付した）。

敗戦後ノ大変革ニハ如何ナル財閥モ華族モ其激流ヲ脱ル、不能、昭和二十四年夏頃ト覚ユ、新聞紙上ニ仙台ノ藩主タリシ伊達家ノ累代ノ墓地モ荒ル、ニ委ント多クノ記録書類モ散佚ヲ防グ由ナシトノ写真掲載ノ記事出デタリシガ、九月頃ナリシ、品川区大井在ノ厩屋ニ伊達家ノ古書・古記録類ノ山積セルヲ、洋本専門ノ古本屋ニ店バカリニテ買求メタリトカ、之レヲ

二名ノ車ニ乗セ、古書市場ニテ競売ニ附シタリキ（勿論貴重品ハ達眼ノ士ヲシテ撰別セシメタルナルベシトハ思フモ）。東京市中ノ和本専門取扱店ニテ其ノコト無カリシワ明白ニテ、斯クテ伊達家物トシテ散逸セリ。サシテ貴重ナリトオボシキ品々ハ一点モナキ模様ナリシナリ、此コニ余ノ所有ト成リシ古筆手鑑ハ、右処分品中ノ尤モ雄品ニシテ村口書店ト入札ヲ争ヒ、琳琅閣ニ落札シタルモノナリ。〈稿者注、以下三行、修正テープが貼られ判読不能〉子孫ハ知ラズ、余ハ其ノ生命ノ許サレタル限り、之レガ最モ忠実ナル保護者トシテ、又最モ理解アル一研究家トシテ、之レガ保存ニ専念セントハスナリ。

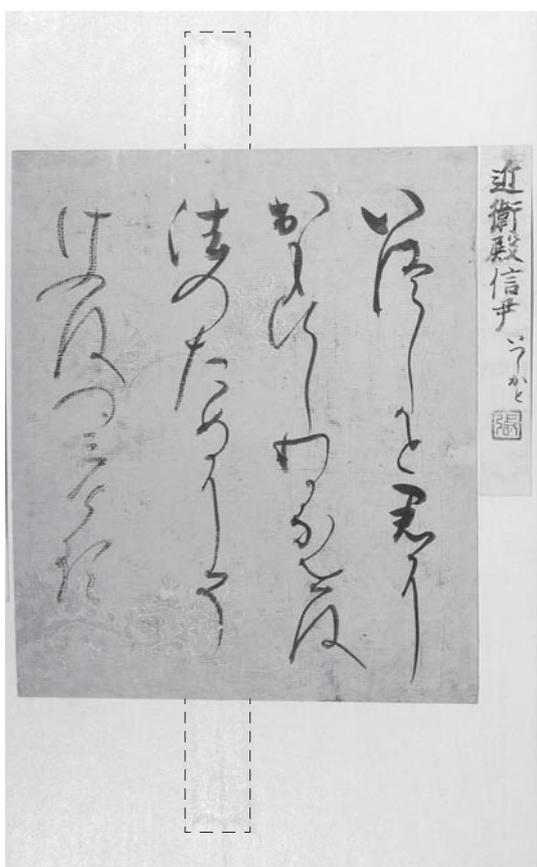
図版一（点線部が糊痕の周囲にあたる、以下図版三まで同）



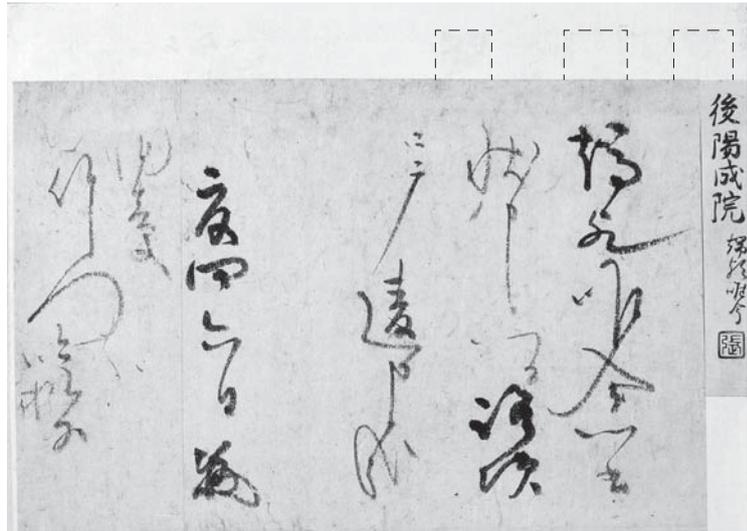
昭和二十四年十一月十七日（稿者注、署名箇所に修正テープが貼られるも、「雄」らしき文字が見える。「□雄」か）（亡父五年祭当日持参ス）
池田継政室和子は享保七年（一七三二）に継政の妻として迎えられたが、元文二年（一七三七）に離縁、実家の伊達家に戻った。押された極札の鑑定家の活躍年代を勘案すると、和子が嫁入り時に持参したのでは齟齬が生じ、離縁して伊達家に戻った後、死去するまでの間に制作され、戦後まで伊達家に伝来したと考えるのが自然であろうか。

箱書の紙数と現状との違いが見られることについては、制作後に手が加えられた可能性を既に指摘したが、極札、または古筆切が剝がされたと思われる痕跡のうち顕著なものを掲げる。図版一は台紙に別の古筆切が貼られてい

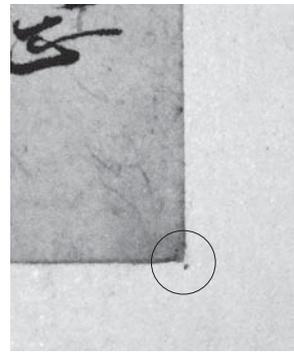
図版二



図版三



図版四



たと思われる糊痕が、図版二・三には極札が貼られていたと思われる糊痕が見られ、こうした箇所は表の面に多い（画像では不鮮明なため、当該箇所を点線で示した）。また、本手鑑には古筆切を台紙に貼付する際の目印としたとされる針穴が多数確認され、制作の一端をうかがうことができる例として図版四（丸印箇所）に掲げた。

また、前項で触れた朱書の極札であるが、新しい料紙に書かれている極札が複数確認されること、八六は「伏見院」を「飛鳥井二楽軒宋世」と修正し

ていること、九三は「卜部は誤り 二条家為家」と記されていることから、当初からの極札ではなく、後世に伝承筆者の修正がなされた際に押されたものであることが分かる。さらに加えるならば、八六・一五九・二一〇が新しい料紙であることと、それぞれの極札は現状の古筆切の配列では前後に齟齬を来していないこと、さらには一六の極札「後奈良天皇」のように、追号から「院」が外された大正十四年（一九二五）以降に付されたと考えられるものも収められていること（一〇一頁）を踏まえると、近代以降に改変が加えられる可能性が導き出せるのである。なお、新しい素紙①・②と朱書の極札は同筆であるようにも見受けられ、このことは本手鑑の成立過程にもつながることから、今後も検討を続けていきたいと考えている。

この他、一一八の極札には下部に糊痕が見られる。極札を貼り替えたか、あるいは通常は極札の下部に押されている極印を切り取る際に剝がしたものであるうか。また、別表備考欄にも記したが、一四の極札は冒頭部を「昨日やけふや」と記しているが、これは貼付された古筆切の前の短句である。現在の冒頭部は「草まくらまたさ夜中におきいて」と、極札に書かれた次の長句であり、制作後に直前の一行が切り取られた可能性を示唆している。こうした古筆切と極札の不一致も、制作された後に改変が加えられたと考える手がかりとなる。

五 主な古筆切について

最後に、本手鑑に押された古筆切で内容面、書道史の面から触れるべき主要な切を紹介したい。『古筆大辞典』^④に収載の古筆切は、同書の項目の名称

に拠った。切の名称は、便宜上一括して「」の形で表記した。

一「大聖武」・二「中聖武」：伝聖武天皇宸筆。大和国の東大寺に伝えられていたので「大和切」とも。一は『賢愚経』の断簡。「大聖武」は、手鑑では最初に押されるべきものとされている。

七：「筑後切」 第九二代伏見天皇（一二六五～一二二七）宸筆の三代集（『古今和歌集』・『後撰和歌集』・『拾遺和歌集』）の断簡で、所収の切は『拾遺和歌集』巻一八。

九：「広沢切」 第九二代伏見天皇宸筆の御製。一首二行を収める。『増補新撰古筆名葉集』では伏見天皇皇子の第九三代後伏見天皇（一二八八～一三三三）宸筆とする。

一二：「書目切」 貞成親王（後崇光院、一三七二～一四五六）御筆。「和歌集」「源氏」「唐鏡」の書名あり。「和歌集」の下部に「権」とあり、貞成親王異母弟の権野寺主（？～一四二三）に預けていたことを示す記載か。この場合、権野寺主が存命中の応永三十年（一四二三）以前のものとなるか。また、「源氏」の上部には「一条殿御預」とある。当時の一条家は経嗣（一三五八～一四一八）・兼良（一四〇二～一三八一）父子の時代であったことを勘案すると、伏見宮家と一条家の交流がうかがえて興味深い。貞成親王の日記『看聞日記』紙背には「即成院預置文書目録」・「法安寺預置文書目録」等の目録類があるが、本切と一致、あるいは関係が想定される書名は見当たらなかった。

一八：「後奈良天皇和歌詠草」 『後奈良院御製』未収。天文頃の詠草と思われる、合点及び添削は三条西公条（一四八七～一五六三）か。同様の体裁の詠草が御物に伝存⁵。

六四：「源氏物語」 関白左大臣を務めたが応仁の乱を避け、土佐に下った

一条教房（一四二三～一八〇）の自筆。現存するツレは多いが、図版から定家様の書風を身に付けていたことが分かる。

七九：「八幡切」 伝飛鳥井雅有筆で、切の名はもと石清水八幡宮に伝えられていたことによる。『後拾遺和歌集』及び『千載和歌集』の断簡であるが、所収の切は『千載和歌集』巻七。鎌倉時代中～後期の書写。

九七：「道也切」 伝二条為重筆で『新古今和歌集』の断簡。南北朝時代の書写。切の名称は古筆家初代、古筆了佐の孫、道也が所蔵していたことによるか。

一一二「写経切」・一一三「光讚経」・一一五「維摩経」：天平期写経の書風を持つ。

一一四「写経切」：唐風の書風を持つ。

一一七：「新勅撰和歌集」 伝慈鎮和尚（慈円）筆で、鎌倉時代初期の書写。現存する新勅撰集の古筆切としては最も古い時代に属する。

一一九：「後撰和歌集」 伝寂蓮筆。寂蓮様の書風を持つ、十二世紀後半の書写。

一九〇：「建仁寺切」 伝東常縁筆であるが、自筆とみられる。『拾遺和歌集』の断簡。

一九八：「尼崎本万葉集」 断簡は「尼崎切」と言われる。料紙が雲母引きされているが、現状は剝落が激しい。巻二の断簡と巻一六の冊子本が現存するが、所収の切は前者に該当する。

二〇一：「角倉切」 伝阿仏尼筆、『後撰和歌集』の断簡。

二〇三：「白氏文集」 伝藤原行成筆であるが、自筆とみられる。

二〇五：「源氏物語」 藤井隆は伝世尊寺行能筆とされる源氏物語の古筆切

四種を紹介するが、所収の切はいずれとも異なる筆跡である。

二一〇：「一遍上人絵詞伝」「一遍上人絵伝」とも。宗俊編述の伝本、室町時代書写の詞書。

二一一：「長門切」「平家物語」諸本のうち、『源平盛衰記』に最も近い本文を持つ（本切は卷二七「天下餓死」。「長門切」は近年、研究の進展著しく、^⑦ 本手鑑所収の切を紹介することにより、今後の進展を期したい。

また、もとは同一の伝本（ツレ）が貼られている箇所もある。三九と四〇、七二と七四、一六七と一七〇がそれにあたるが、連続しておらず、別箇所の切が同一手鑑内に収められたものである。

以上、内容に不十分な点があるかもしれないが、ここに大方の御批正を請うと共に、本手鑑の紹介により、日本文学や日本史、さらには書道史の研究に資するならば幸いである。

注

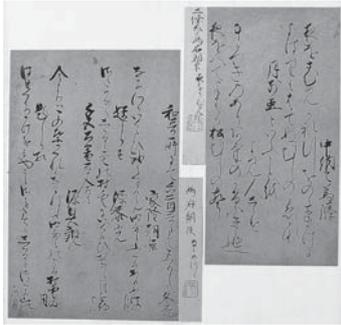
- (1) 古筆切番号一～五八についてはカラー写真、その他は白黒写真で掲載した。全ての古筆切については、宮内庁ホームページ「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」にてカラー画像で閲覧可能である。
- (2) 極札の筆跡については、村上翠亭・高城弘一監修『古筆鑑定必携 古筆切と極札』（淡交社、平成十六年）に詳しい。
- (3) その他、古筆了佐や古筆了周といった、本稿で触れた古筆家歴代の生没年は慶応三年（一八六七）刊『和漢書画古筆鑑定家印譜』によった。
- (4) 春名好重編著（淡交社、昭和五四年）
- (5) 宮内庁三の丸尚蔵館・宮内庁書陵部『御即位十年記念特別展 第二回 展 宸翰と日本文化の伝統』（宮内庁、平成十一年）三九頁に掲載。

(6) 『続々国文学古筆切入門』一七八～一七九頁（和泉書院、平成四年）。

(7) 松尾葦江「長門切からわかること―平家物語成立論・諸本論の新展開―」（『國學院雑誌』第一一八巻第五号、平成二十九年三月）等。

104	①定為法印 ②二条家【定為法印】 ③定為法印	四半切 古今《日安》 四半 古今歌一行書《新撰》	古今集	巻5 (304-308)	鎌倉	古今集	25.6	16.2	古筆7葉(5代) 古筆7任(分家2代)	12.5	2.0	
105	冷泉殿之相卿	四半 《新撰御集》	古今集	巻5 (266-267)	鎌倉	古今集	19.4	10.4	古筆7葉(5代)	13.9	1.8	『古筆学大成』51、126-130図のツレ
106	上冷泉殿之相卿	後撰集	古今集	巻4 (184-188)	室町	古今集	25.9	15.0	不明1	13.1	2.0	
107	①冷泉殿之相卿 ②冷泉殿之相卿	古今集	古今集	巻6 (333-335)	室町	古今集	25.5	11.2	藤本了因(6代)	14.2	2.1	
108	冷泉殿之相卿	新撰御集	新撰御集	巻2 (73-75)	室町	新撰御集	25.7	12.8	古筆7葉(分家3代)	12.5	1.8	『神明文庫蔵』『大手鑑』(古筆学大成124、73図)等のツレ
109	上冷泉殿之相卿	古今集	古今集	巻14 (729-731)	室町	古今集	21.5	6.5	古筆7葉(分家3代)	13.1	2.0	『関山美術館蔵』『世々の友』(古筆学大成51、171図)等のツレ
110	上冷泉殿之相卿	色紙(目録歌等)	色紙(通具歌)	巻5 (通具歌)	江戸	江戸	15.3	11.9	不明4	14.5	2.0	
111	五条殿之相卿	新古今集	新古今集	巻14 (1312-1315)	室町	室町	25.5	16.1	朝倉茂人(初代)	14.0	2.1	
112	伝教大師	写経切	写経切	大鏡若経か	奈良	奈良	21.4	8.0	古筆7葉(分家3代)	13.2	2.2	『關2.0』(上部切断のため界高の測定はできず)
113	伝教大師	写経切	写経切		奈良	奈良	19.2	5.2	朝倉茂人(初代)	12.1	2.0	『有界』21.5×1.9
114	伝教大師	写経切	写経切		奈良	奈良	19.2	5.2	平家平兵衛	12.1	1.8	『關1.6』(上部切断のため界高の測定はできず)
115	徳光大師	維摩経	維摩経		奈良	奈良	25.6	7.2	新しい葉紙②	9.3	1.5	『有界』22.5×2.4
116	徳光大師	蓮歌切	蓮歌切		鎌倉	鎌倉	14.6	15.2	古筆7葉(2代)か	10.7	1.7	
117	徳光大師	新古今集	新古今集	巻6 (378-380)	鎌倉	鎌倉	16.3	14.8	不明6	14.5	2.0	『古筆学大成』111、63図、『関文古筆切入』28図のツレ
118	徳光大師	後撰集	後撰集	巻1 (68-70)	鎌倉	鎌倉	15.9	14.4	不明6	12.2	2.4	『關2.0』(上部切断のため界高の測定はできず)
119	寂蓮法師	後撰集	後撰集	巻5 (242-243)	平安	平安	22.2	8.2	古筆7葉(5代)	12.1	2.1	『古筆学大成』61、101、102、104、105図のツレ
120	伊予守	新古今集	新古今集	巻13 (659-661)	南北朝	南北朝	21.0	12.5	古筆7葉(分家3代)	13.3	2.2	
121	蓮運	新古今集	新古今集	巻6 (701、702)	南北朝	南北朝	22.3	14.8	古筆7任(分家2代)	12.2	1.8	『古筆切影印刷蔵』新古今集蔵』101-103頁のツレか
122	常光院藏	新古今集	新古今集	巻4 (284-286)	室町	室町	24.7	16.6	不明1	13.1	2.0	
123	基親法師	寛弘源集	寛弘源集	巻2 (146、147)	南北朝	南北朝	12.1	9.7	古筆7葉(初代)	11.4	1.9	
124	基親法師	寛弘源集	寛弘源集	巻12 (1209-1211)	室町	室町	12.1	13.6	古筆7葉(初代)	14.5	2.0	『神明文庫蔵』『大手鑑』下(古筆学大成124、154図)等のツレ
125	四条通基親	新治通基親	新治通基親	巻4 (376)	室町	室町	25.7	14.5	不明1	13.1	2.0	『有界』(金判) 25.0×3.8
126	菜園法師	蓮歌切	蓮歌切		室町	室町	16.3	8.7	畠山申庵(初代)	13.0	1.9	
127	招月庵藏書記	古今集	古今集	巻12 (607-612)	室町	室町	16.3	8.7	畠山申庵(初代)	11.8	1.9	
128	招月庵藏書記	御阿含題百首抄書	御阿含題百首抄書	101、106、111、116、121番	室町	室町	27.4	16.4	不明1	13.1	1.9	
129	徹書記	千載集	千載集	巻16 (974)	室町	室町	25.8	10.2	古筆7葉(分家3代)	12.1	2.0	
130	徹書記門人正広	新古今集	新古今集	巻10 (948-951)	室町	室町	19.2	11.8	古筆7葉(6代)	14.0	2.2	
131	日頭正広	張一首一行書 四半《日安》か	張一首一行書 四半《日安》か	1362-1365	室町	室町	21.9	15.7	不明3(4代)	5.5	2.0	
132	徹書記門人正広	張一首一行書 四半《日安》か	張一首一行書 四半《日安》か	1367-1375	室町	室町	23.9	15.8	古筆7葉(6代)	14.3	2.1	
133	尊順	蓮歌切	蓮歌切	巻11 (777-780)	室町	室町	13.7	7.2	不明7	15.2	2.3	
134	兼藏法師	歌切	歌切		室町	室町	19.4	7.5	古筆7葉(分家3代)	13.3	2.0	『十五 まほろし まほろし』のよるへの若もか、リ次のみ、あまたの雨のしづくな をらん 廿六 かぐれなし』と記す
135	辨圓軒兼藏	色紙(百人一首他)	色紙(百人一首他)	99 (後鳥羽院御覽)	室町	室町	19.5	17.6	不明1	13.1	2.0	
136	辨圓軒兼藏	源氏物語	源氏物語	夕顔巻(光源氏歌)	室町	室町	18.8	8.3	畠山申庵(初代)	12.9	2.0	
137	三寸守持教 【徹書記門人】	草集抜書	草集抜書	496?-4964、5053-5055、5260 5261番	室町	室町	25.4	17.5	古筆7葉(5代)	12.1	2.0	
138	牡丹花	新古今集	新古今集	巻19 (1886-1888)	室町	室町	21.7	12.3	古筆7葉(分家3代)	13.3	2.1	『徳川美術館蔵』『風流名』(古筆学大成111、133図)等のツレ
139	蓮歌師宗長	蓮歌師宗長	蓮歌師宗長	1604-1606、1611、1612、1615、1616	室町	室町	16.7	13.5	朝倉茂人(初代)	14.5	2.0	
140	蓮歌師宗輔	新古今集	新古今集	巻16 (1308-1511)	室町	室町	19.2	14.2	古筆7葉(分家3代)	13.5	1.8	
141	蓮歌師宗助	伊勢物語	伊勢物語	巻92段	室町	室町	21.2	12.5	朝倉茂人(初代)	14.0	1.9	
142	月鑑	色紙(新古今集他)	色紙(新古今集他)	巻6 (591) 扇甲歌	室町	室町	16.9	12.1	古筆7葉(6代)	14.0	2.1	
143	北野松尾院藏書	蓮歌切	蓮歌切		室町	室町	18.5	13.9	古筆7葉(6代)	14.1	2.2	
144	北野松尾院藏書	毛刺千句	毛刺千句	64-66番	安土桃山	安土桃山	16.2	14.1				『徳川美術館蔵』『世々の友』(古筆学大成124、154図)等のツレ
145	大徳寺(マ) 庵和 145前	黄庭賦詩	黄庭賦詩		江戸	江戸	25.0	6.5	不明7	17.1	2.1	
146	大徳寺神徳和尚	和漢通切切か	和漢通切切か		江戸	江戸	25.3	17.0	朝倉茂人(初代)	15.1	2.8	
147	大徳寺【紫岩和尚】	色紙(山崎宗鑑詩)	色紙(山崎宗鑑詩)	五言二句	江戸	江戸	16.7	13.0	古筆7任(分家2代)	12.1	1.8	
148	仏通院朝朝	色紙(相道明泳集)	色紙(相道明泳集)	(190) 赤入歌	江戸	江戸	21.4	15.3	古筆7葉(分家3代)	12.1	2.1	
149	仏通院長円	色紙(三十六人歌合)	色紙(三十六人歌合)	7番左(実定歌)	室町	室町	21.4	16.9	古筆7葉(分家3代)	13.1	2.1	
150	高野山蓮華	色紙(源水集)	色紙(源水集)	趣蓮詩	江戸	江戸	15.8	12.8	朝倉茂人(初代)	12.6	2.1	
151	松尾院宗長	色紙(新撰御集他)	色紙(新撰御集他)	巻14 (1009) 定家歌	江戸	江戸	18.5	17.0	朝倉茂人(初代)	13.9	2.1	
152	蓮歌師宗巴	林間抄	林間抄	常夏巻	室町	室町	25.8	12.5	古筆7葉(2代)か	13.0	1.9	『源氏物語新編集』第3部22図のツレ
153	東寺金剛院白清	色紙(相道明泳集)	色紙(相道明泳集)	尊敬詩	安土桃山	安土桃山	22.8	12.1	不明1	13.1	2.0	
154	東寺金剛院白清	色紙(相道明泳集)	色紙(相道明泳集)	57番(貫之歌)	安土桃山	安土桃山	27.6	20.3	朝倉茂人(初代)	14.0	2.0	
155	建仁寺遺稿	書札切	書札切		室町	室町	21.2	13.2	不明1	12.0	2.0	
156	忍堂	蓮歌切	蓮歌切		室町	室町	21.5	17.0	不明1	12.7	2.0	
157	豊前西ノ院清超	百人一首	百人一首	79-81番	室町	室町	27.9	15.3	藤井常智	14.2	1.9	『関山家水青文庫蔵刊』別巻『手鑑』133図のツレ
158	西福院隆慶	相道明泳集	相道明泳集		室町	室町	17.1	13.2	不明8	8.1	1.6	『櫻札を讀み、松花堂ナリ』と朱書(不明3の筆跡)、布目あり
159	後醍醐院	色紙(相道明泳集)	色紙(相道明泳集)	520番(女忠歌)	江戸	江戸	21.1	16.8	朝倉茂人(初代)	13.8	2.0	
160	龍木切明集	源氏物語	源氏物語	明石巻(光源氏歌)	室町	室町	17.7	8.5	不明7	15.5	2.4	『関山美術館蔵書』古筆学大成1 玉海』313図のツレか
161	永運	蓮歌切	蓮歌切		室町	室町	16.1	12.1	不明9	6.0	1.9	
162	徹書記門人 正教	蓮歌切	蓮歌切		室町	室町	14.5	18.6	畠山申庵(初代)	13.1	1.9	
163	徹書記門人 正教	百人一首注か	百人一首注か		室町	室町	21.3	16.5	不明1	13.1	1.9	『関山美術館蔵』『世々の友』(古筆学大成124、154図)等のツレ
164	坂東源宗椿	源氏物語抜書	源氏物語抜書	末納花巻	室町	室町	21.3	16.5	不明1	13.1	1.9	『関山美術館蔵』『世々の友』(古筆学大成124、154図)等のツレ

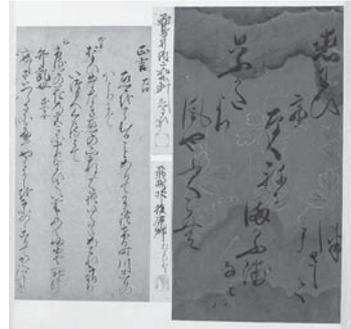
165	法顯撰 【漢人翻說集作者】		宋譯歌集		室町	27.5	19.5	朝倉茂人(初代)	13.9	2.0	
166	藤三位朝政		仏書切		鎌倉	26.1	16.3	不明1	13.1	1.9	
167	大智度論		指通愚草	上(1449-1454)	室町	25.0	11.2	古筆了榮(2代)	12.7	1.8	
168	①空阿彌親公 ②大智度論親公		新古今集	巻18(1880-1851)	室町	16.9	7.3	朝倉茂人(初代) 古筆了榮(2代)	13.8 12.8	2.0 2.0	岡山美術館蔵『世々の友』(古筆手鑑大成50 138図)等のワッ
169	大智度論親公		新古今集	巻17(1927-1929)	江戸初	25.4	16.5	不明1	13.1	1.9	梅沢記念館蔵『あけぼの』上(古筆手鑑大成60 116図)等のワッ
170	大智度論親公		指通愚草	上(1338-1387)	室町	21.3	12.8	古筆了榮(5代)	14.4	2.0	167のワッ
171	常陸院親公		定家十帖	200-201番	室町	19.6	18.0	不明1	13.2	2.0	
172	常陸院親公		色紙(新古今集他)	巻6(165) 実臣歌	室町	21.7	11.9	藤井常智	13.1	1.9	
173	公方常陸院親公		新古今集	巻17(1642-1645)	室町	19.6	15.2	朝倉茂人(初代)	14.4	2.0	梅沢記念館蔵『あけぼの』上(古筆手鑑大成60 115図)等のワッ
174	①常陸院親公 ②常陸院親公		色紙(終括連集他)	巻6(404) 紀伊式部歌	室町	19.6	15.2	古筆了榮(5代)	14.4	2.1	
175	常陸院親公		天徳内東歌合	27-28番	室町	23.4	8.4	古筆了榮(分家3代)	13.1	2.0	
176	常陸院親公		内東百番制合	148-149番	室町	25.4	9.5	古筆了榮(6代)	14.1	2.2	岡山美術館蔵『世々の友』(古筆手鑑大成50 139図)のワッ
177	①細川勝持之 ②細川勝持之		新古今集	巻9(874-875)	室町	25.5	14.9	古筆了榮(5代)	12.5	2.1	『細川家水書文庫蔵刊 別巻 手鑑』246図のワッ
178	細川勝持之朝臣		伊勢物語	新古今集(96)	室町	18.6	15.9	古筆了榮(5代)	12.1	1.7	
179	細川勝持之		色紙(正二集他)	75-76段	室町	25.5	14.0	不明1	12.4	2.0	
180	今山氏良		色紙(正二集他)	557番	安土橋山	15.6	15.8	古筆了榮(6代)	14.3	2.1	
181	岩州奥田職元信		房歌	巻12(1115)	室町	18.9	16.5	古筆了榮(5代)	14.4	2.1	
182	飯尾之進		金葉集	巻1(14-16)	室町	25.4	14.7	不明1	13.1	2.0	『龍山黎明会蔵書 古筆手鑑編1 玉海』344図等のワッ
183	飯尾之左衛門常房		和道朗集	463番(白居鳥詩)	室町	33.5	6.8	不明1	17.0	2.1	
184	三浦道玄		新龍吟集	巻13(1265-1268)	室町	21.5	15.3	不明1	13.1	1.9	『龍山黎明会蔵書 古筆手鑑編2 蓬左』96図等のワッ
185	【一巻四法名道寸】		三浦赤義向(各名道一寸一行事和歌)	998-999番	室町	25.0	11.5	古筆了榮(初代)	11.0	1.7	
186	寸】		三浦赤義向(各名道一寸一行事和歌)	998-999番	室町	25.2	16.1	古筆了榮(5代)	14.3	2.1	『龍山黎明会蔵書 古筆手鑑編4 集古地』139図のワッ
187	相州十中職速忠		新古今集他	巻6(557) 俊顯歌	室町	26.7	5.1	古筆了榮(5代)	14.4	2.0	
188	十中兵衛		玉葉集	巻2(267,276,287)	室町	9.0		不明1	9.0	1.5	
189	十中兵衛		千載集	巻19(1219) 蓮華法師歌	室町	21.5	5.2	古筆了榮(6代)	14.3	2.1	四箇に翻の別題あり、当初はこの裏面を貼付していたか
190	東下町守常縁		拾遺集	巻15(222) 能宣歌	室町	21.7	4.5	古筆了榮(2代)	14.3	2.0	徳川美術館蔵『風風古』(古筆手鑑大成11 110図)等のワッ
191	東基連		古今集	巻17(870-872)	室町	19.4	12.5	不明1	13.1	1.9	『龍山黎明会蔵書 古筆手鑑編2 蓬左』95図のワッ
192	岩山道隆		重穂集	巻10(1230)	室町	32.5	11.0	古筆了榮(分家3代)	13.3	2.1	
193	岩山道隆		源氏物語	若菜下巻	室町	25.4	4.9	古筆了榮(6代)	14.2	2.1	
194	豊臣秀頼公		拾遺集他	巻5(267)	江戸	19.3	17.8	古筆了榮(5代)	14.3	2.1	
195	秀頼公		和歌色紙		江戸	16.4	15.2	古筆了榮(3代)	13.0	2.0	古今集巻1(69) 古今歌『新編たむびく山の形をうつるむねとや世おほり行』 翻字『新編たむびく山のさくらなつたなくさぬ雪かたをみる』
196	木下長晴		新白集	巻1(152)	江戸	27.2	21.7	古筆了榮(分家3代)	13.2	2.1	
197	山崎治護		新物撰集	巻2(133-138(138は作者まで))	室町	26.4	19.5	不明1	13.1	1.9	
198	源俊賴		万葉集	巻12(980-82)	鎌倉	26.9	15.4	古筆了榮(3代)	13.8	2.0	白鶴美術館蔵『手鑑』(古筆手鑑大成24 76図)等のワッ
199	家持卿		後拾遺集	巻16(969-970)	鎌倉	21.8	10.3	不明3(4)	5.7	1.8	
200	鎌倉東慶寺(秀頼公御息女)		源氏物語	藤更葉	江戸	17.2	14.4	畠山千庵(初代)	13.2	1.8	
201	四季島阿仏		後撰集	巻12(876-878)	鎌倉	21.7	13.7	不明3(4)	10.5	2.1	徳川美術館蔵『風風古』(古筆手鑑大成11 96図)等のワッ
202	世尊寺殿行成卿		写経切		平安	25.2	8.1	朝倉茂人(初代)	14.0	2.0	題『大蔵經講』
203	世尊寺殿行成卿		白氏文集	巻61『神吟先生伝』	平安	27.0	5.8	不明1	13.2	1.9	『古筆字大成25』48頁等のワッ
204	世尊寺殿行成卿		詩歌合切		鎌倉	32.5	10.2	古筆了榮(5代)	14.5	1.9	和漢朗詠集724番と新古今集1808番
205	行能		和漢朗詠集	賢木巻	鎌倉	15.4	14.4	不明1	8.9	1.7	藤井隆氏の解説(『古筆手鑑大成15』219図)のワッ
206	世尊寺殿定成		和漢朗詠集	下(524-527)	鎌倉	33.8	14.0	不明1	13.1	1.9	美保寺蔵『手鑑』(古筆手鑑大成15) 219図)のワッ
207	世尊寺殿行尹		色紙切		南北朝	23.6	11.9	不明1	13.2	1.9	
208	世尊寺殿行尹		元韻文集		南北朝	19.8	21.0	不明1	13.2	1.9	
209	世尊寺殿【行尹】		未詳歌集	巻7第4段	南北朝	26.7	14.8	平塚平兵衛	13.1	1.9	
210	世尊寺殿行成卿		一通聖人経詞伝		室町	28.7	14.8	不明1	13.1	1.9	
211	世尊寺殿行成卿		源平盛衰記	巻27(天下戦死)	南北朝	28.8	13.0	古筆了榮(2代)	12.9	2.0	『行房』を未書(不明3の筆跡)にて「臣(行起)と訂正
212	世尊寺殿行成卿		千載集	巻3(172-174番)	南北朝	22.2	13.1	古筆了榮(分家3代)	13.2	2.1	『古筆字大成』の項目「長門切」、 岡山美術館蔵『世々の友』(古筆手鑑大成50 83図)等のワッ
213	八条院皇親王		色紙(新古今集他)	巻5(483番) 兼盛歌	江戸前	16.0	14.8	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	以下の色紙は同じ下経
214	梶井宮藤親王		色紙(新古今集他)	巻2(134番) 男短歌	江戸前	15.8	14.7	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
215	鎌吉親公		色紙(新古今集他)	巻2(104番) 男入歌	江戸前	15.7	14.8	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
216	一本殿教範公		色紙(終括連集他)	巻5(304番) 寄春歌	江戸前	16.1	14.9	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
217	法隆寺教範公		色紙(新古今集他)	巻7(360) 男短歌	江戸前	15.9	14.5	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
218	西園寺殿定成卿		色紙(新撰集他)	巻2(115番) 良経歌	江戸前	15.9	14.5	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
219	正親町殿定成卿		色紙(新撰集他)	巻1(13番) 俊成歌	江戸前	16.0	14.7	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
220	三条院定成卿		色紙(新古今集)	巻2(106番) 行家歌	江戸前	15.7	14.8	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	
221	三条院定成卿		色紙(古今集他)	巻1(53番) 業平歌	江戸前	15.7	14.7	古筆了榮(6代)	14.4	2.1	



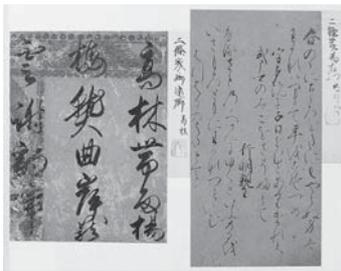
100, 101



92, 93



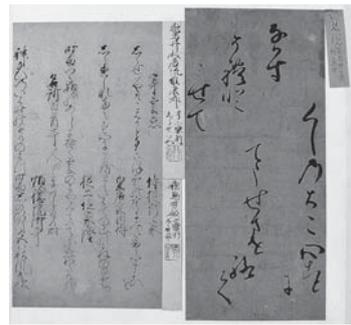
84, 85



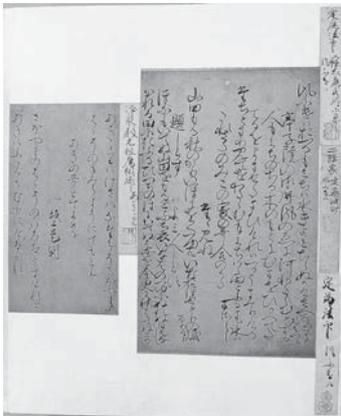
102, 103



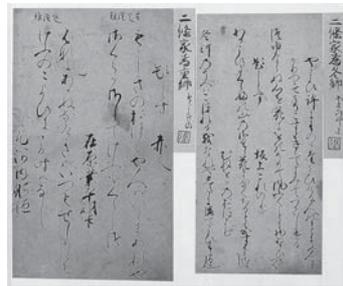
94, 95



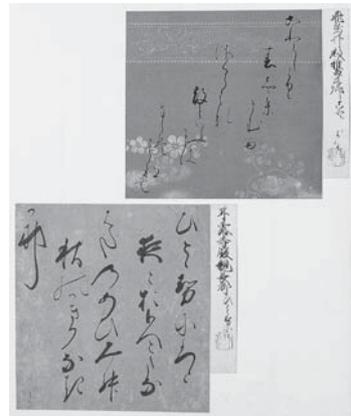
86, 87



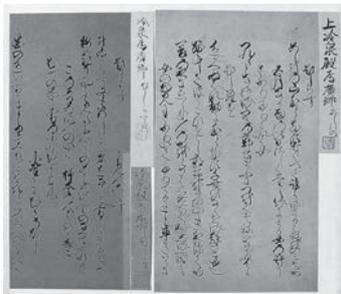
104, 105



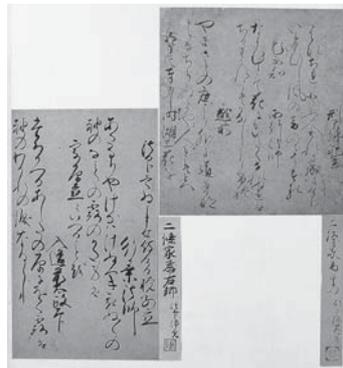
96, 97



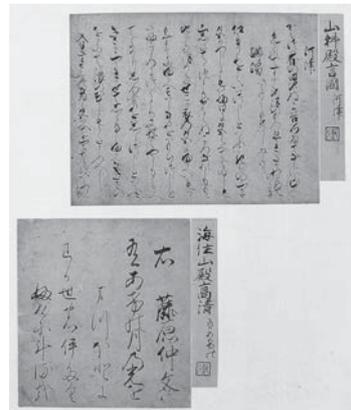
88, 89



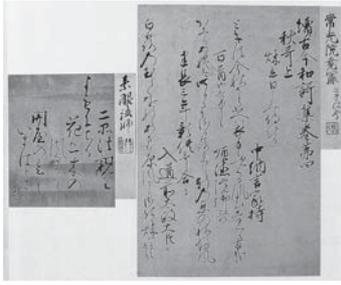
106, 107



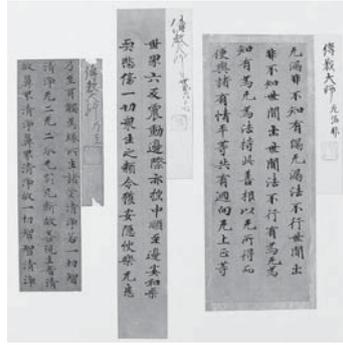
98, 99



90, 91



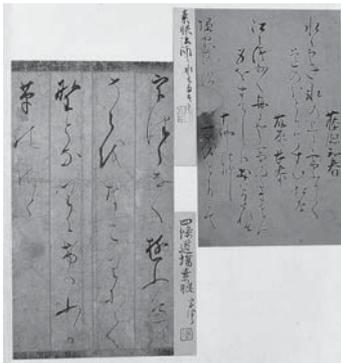
122, 123



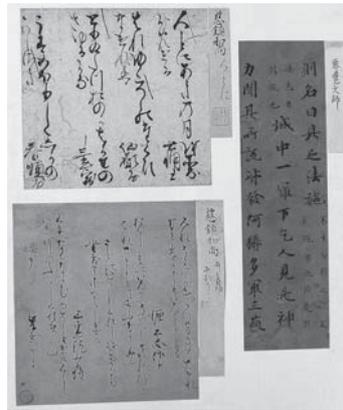
112~114



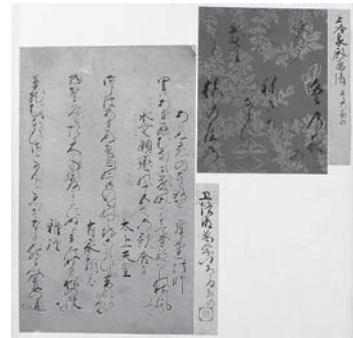
108, 109



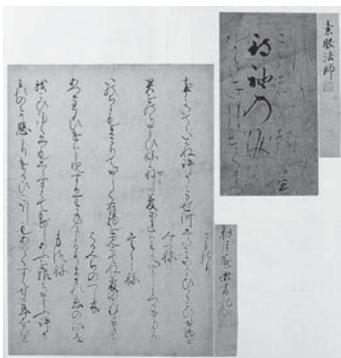
124, 125



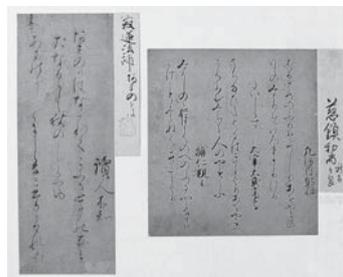
115~117



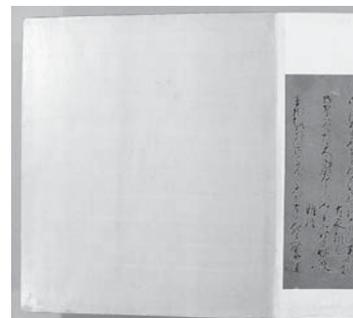
110, 111



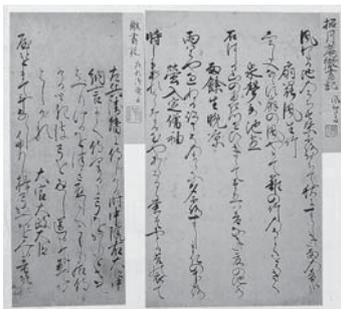
126, 127



118, 119



表面末尾



128, 129



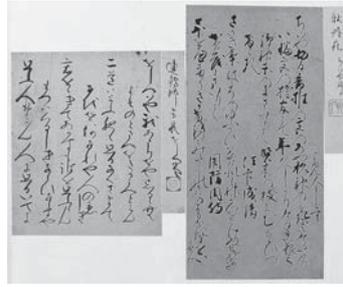
120, 121



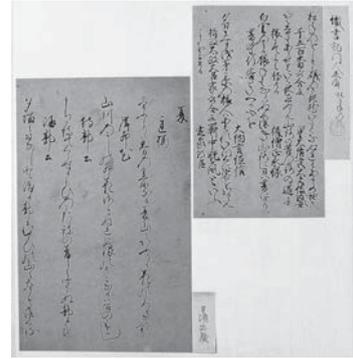
裏面見返



147、148



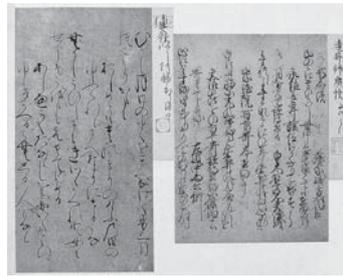
138、139



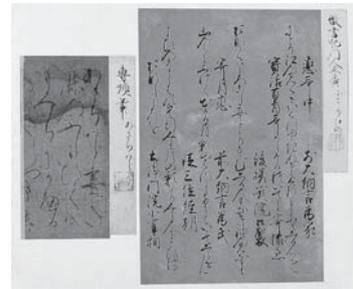
130、131



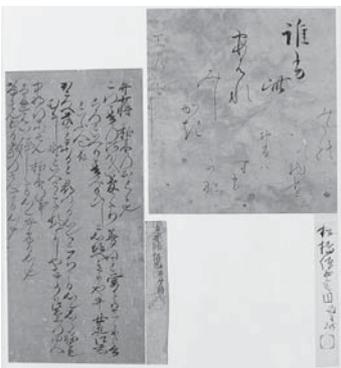
149、150



140、141



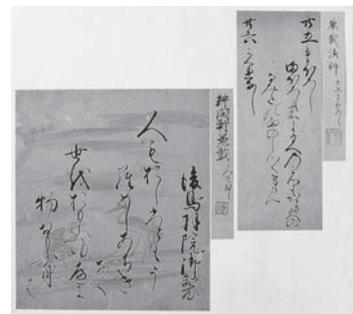
132、133



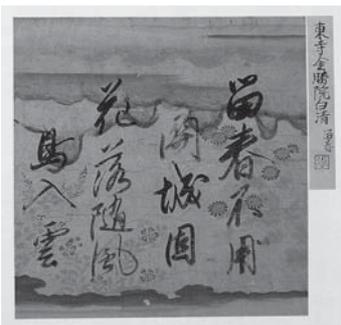
151、152



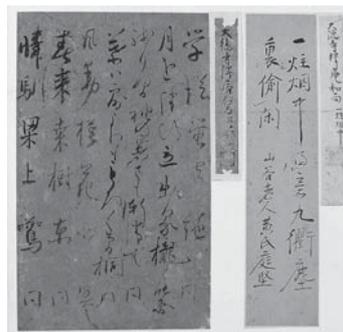
142~144



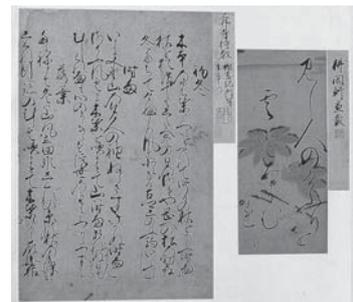
134、135



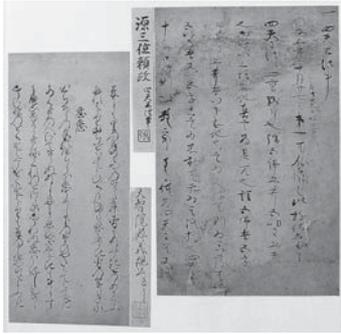
153



145、146



136、137



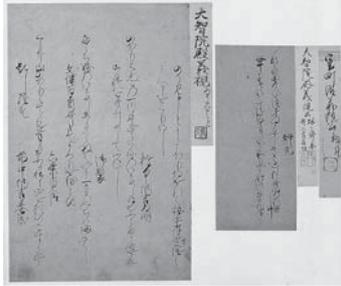
166, 167



160, 161



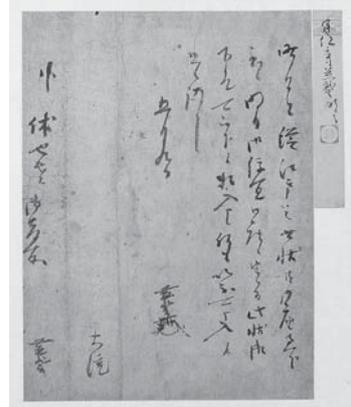
154



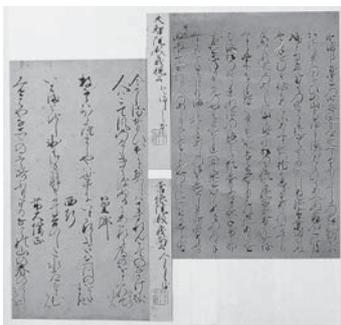
168, 169



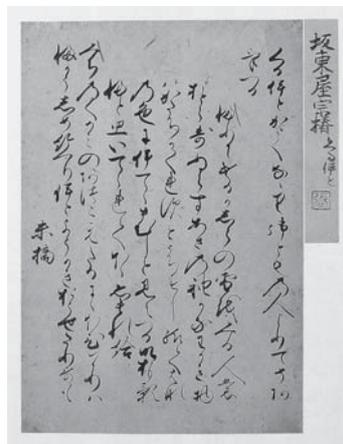
162, 163



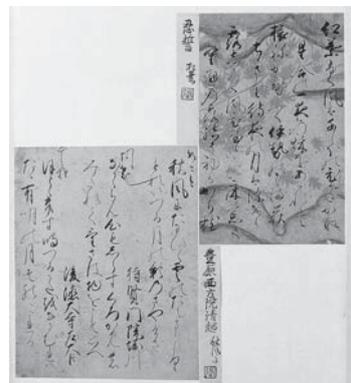
155



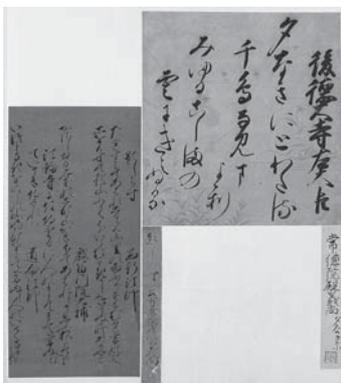
170, 171



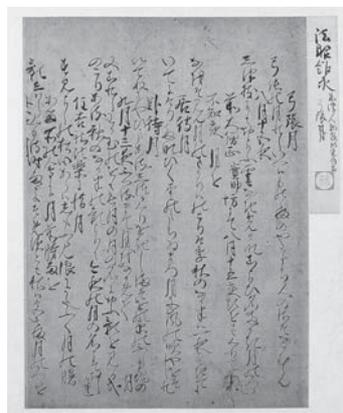
164



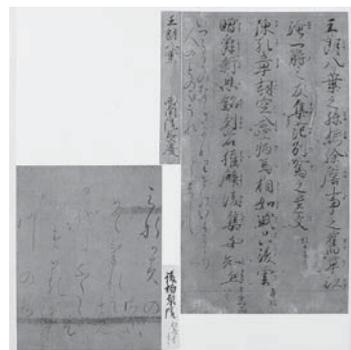
156, 157



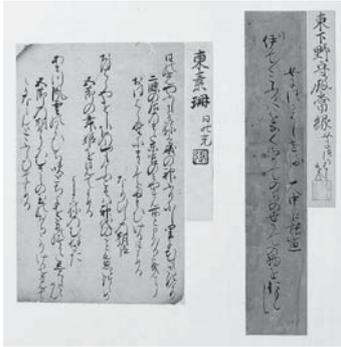
172, 173



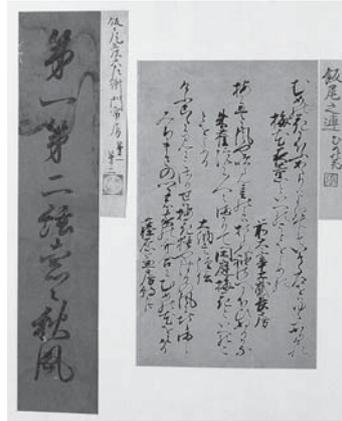
165



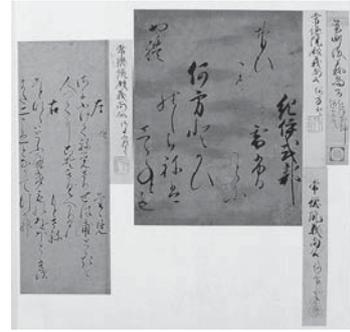
158, 159



190, 191



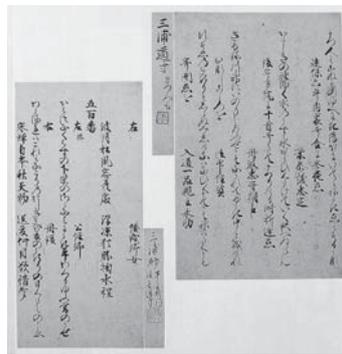
182, 183



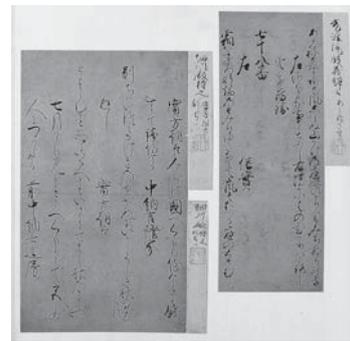
174, 175



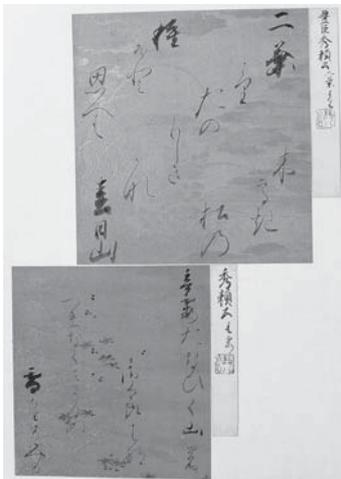
192, 193



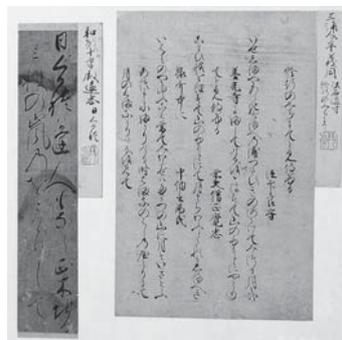
184, 185



176, 177



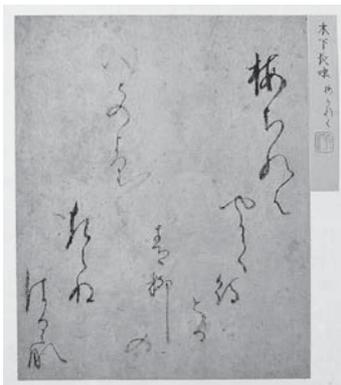
194, 195



186, 187



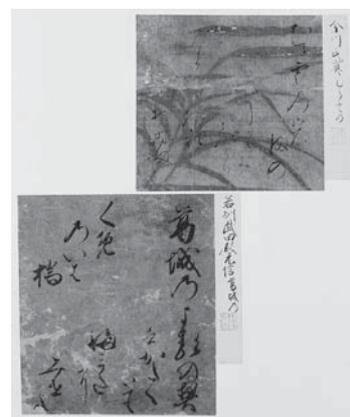
178, 179



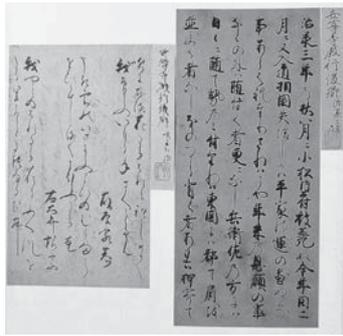
196



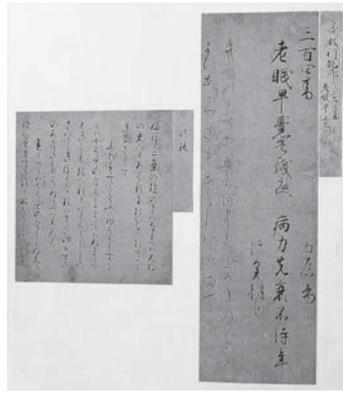
188, 189



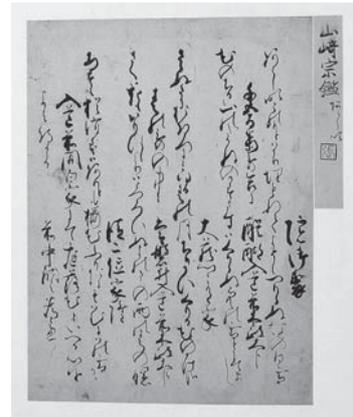
180, 181



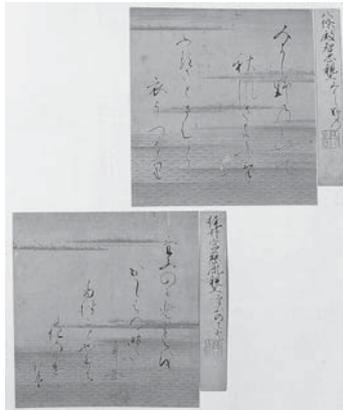
211, 212



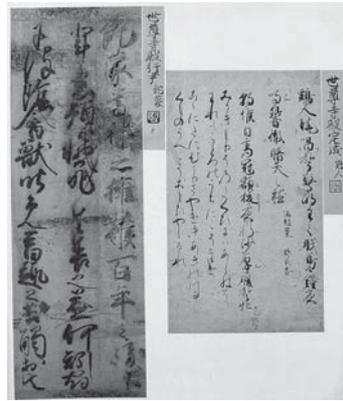
204, 205



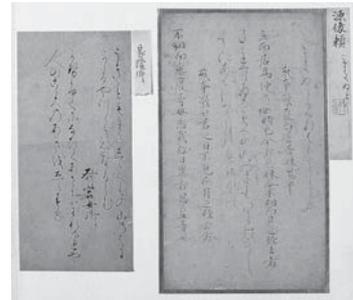
197



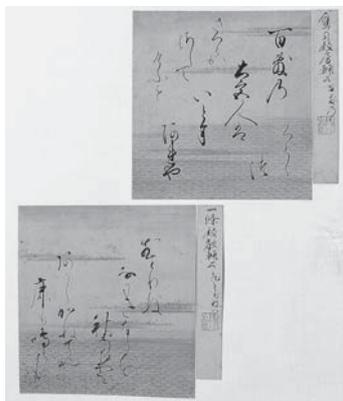
213, 214



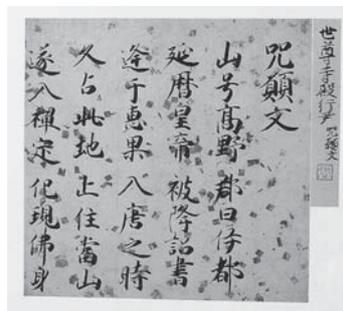
206, 207



198, 199



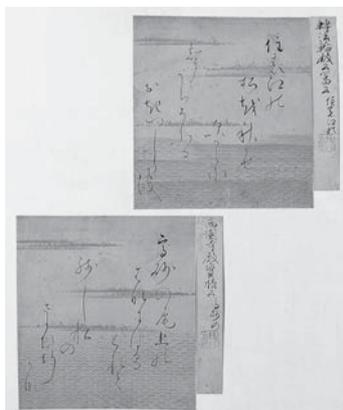
215, 216



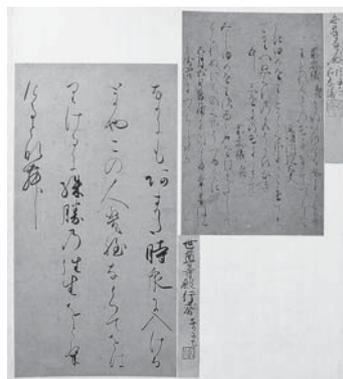
208



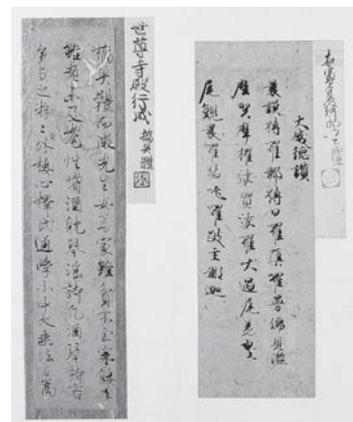
200, 201



217, 218



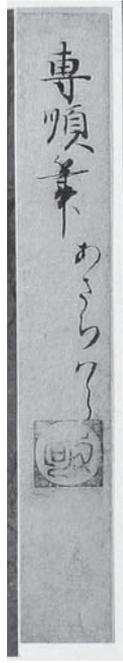
209, 210



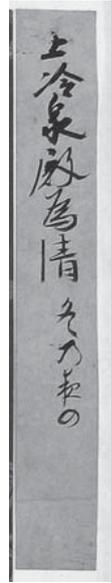
202, 203



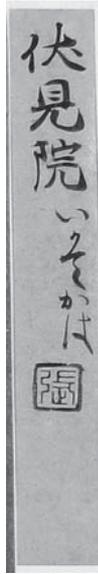
代筆か



7

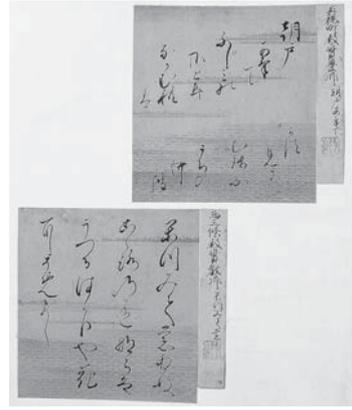


4



1

以下、筆者不明の極札



219, 220

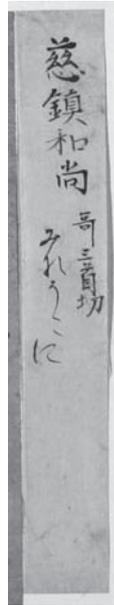


新しい素紙①

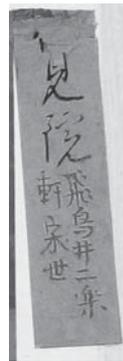


8

(斜線、割書は朱)

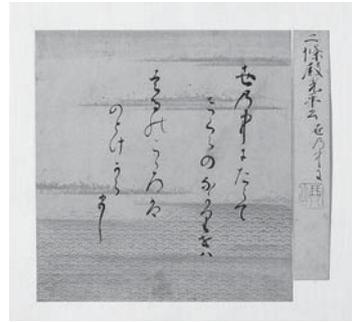


5

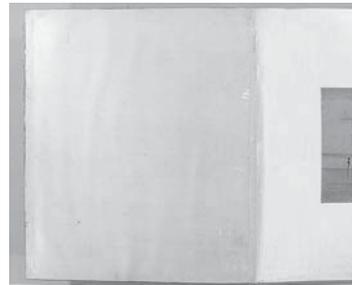


2

(割書は朱)



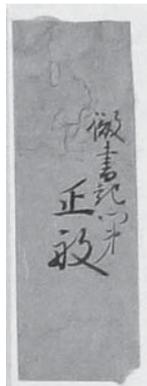
221



裏面末尾



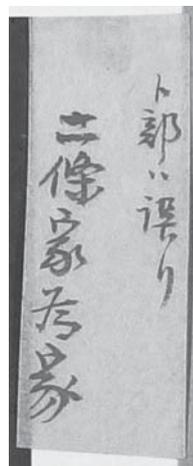
新しい素紙②



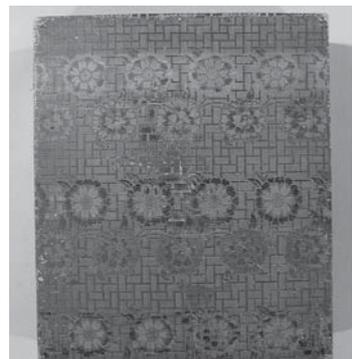
9



6



3 (朱)



裏表紙

